

しれない。なぜなら、ここで共生を目指すなら、「日本語」が出来ないといけない科目になるから。得意科目・不得意科目があってもいいはずなのに、「日本語」という科目が絶対的な優位に持ち上げられている。自文化への誇りや大切さなどより、

「日本人」に合わせて「日本語」を話すことがよほど緊急なことになるだろう。しかし、このような海外から来た人々に迎合を強いる多文化共生が果たして良いかという疑問は、ずっと頭から消え去る事はなかった。

令和4年度 子ども国際理解サマースクール報告

サマースクールに参加して

国際学部3年 高良 ユカリ

今回のサマースクールの企画運営は、私にとってとても貴重な経験となりました。過去のサマースクールに参加したことのある学生スタッフがいなかったことで、大きな不安を抱えていました。前日まで、自分たちが企画したものが上手くいくのか、ずっと心配でした。しかし、当日は子どもたちが楽しんでいる姿を見て安心しました。

サマースクール午前の部では、スタンプラリーを通して子どもたちにフランス・ドイツ・ブラジル・フィリピン・ペルー・中国・カンボジアについて学んでもらいました。各国の世界遺産や食べ物、文化、日本とのつながりなどについてあらかじめ作ったポスターを使いながら簡単な説明を行った後、クイズに答えてもらうというような形で行いました。多くの子どもたちが「それ知っている!」「食べてみたい!」「これはどうなの?」などと各国に興味を持ってくれたことに驚きました。午後の部では、ドイツ・ブラジル・フィリピン・中国・アメリカの遊びを体験してもらいました。また、いくつかの国の伝統衣装を準備し、着付け体験も行いました。子どもたちの楽しそうに遊んでいる姿や伝統衣装を着ている姿がとても印象的でした。

企画の段階では、子どもたちが楽しみながら異文化について学んだり触れたりできることをつねに意識していました。そのため、子どもたちが楽しんでいる、興味を持ってくれている様子を見てとても嬉しかったです。今回のサマースク

ールには、ドイツとカンボジアからの留学生や外国にルーツのある学生が多く参加してくれました。このような、学生と一緒に遊んだことや一日を過ごしたことは子どもたちにとってとても貴重な機会になったのではないかと思います。異文化について楽しく学んだこと、興味を持ったこと、外国にルーツのある大学生と一緒に過ごしたことが参加してくれた子どもたちに何か影響を与えることができたら嬉しいです。

他者・文化を理解するためにはまずは、興味を持つことが重要だと思います。そして、今回のサマースクールが子どもたちにこのような機会になったのではないかと思います。サマースクールを通して感じたこと、学んだことが子どもたちのどこかに残って、いつか役に立つことができればとても嬉しいです。私たち大学生にとっても、今回のサマースクールはたくさんのことを学ぶことができた素晴らしい機会でした。

